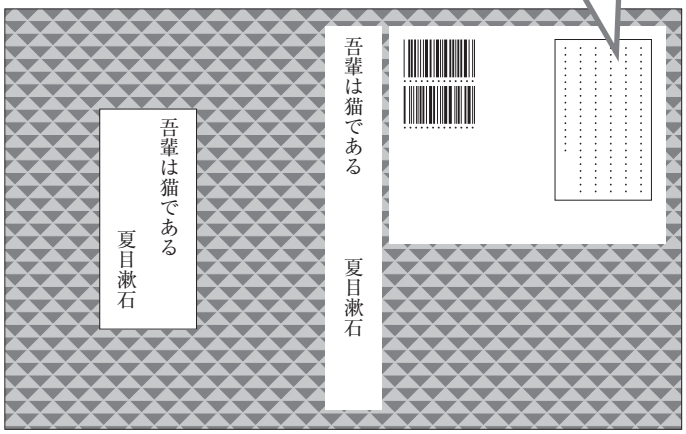
3 次は、夏目漱石（なつめそうせき）の作品『吾輩（わがはい）は猫である』の本のカバーに書かれている**【紹介】**と、**【文章の一部】**です。これらを読んで、あとの問いに答えなさい。

【紹介】

中学教師の苦沙弥（くしゃみ）先生の家で暮らす猫「吾輩」から見れば、世の中は全くもって滑稽そのもの。周囲の様子を観察し、様々に評価する。ユーモアあふれる長編小説である本作は、漱石が三十八歳のときに発表して以来、多くの読者に愛されてきた。今なお、多くの人の共感を呼ぶ名作。



【文章の一部】

〔ここまでのあらすじ〕　苦沙弥先生の家で暮らすことになった猫の「吾輩」は、ある日、家の裏にある茶畠（ちゃばたけ）で黒猫の「黒（くろ）」と出会う。「黒」は大きな体格で、車屋（人力車を引く人）に飼われている乱暴猫である。それ以来、「吾輩」はたびたび「黒」に出くわすようになる。

ある日、例のごとく吾輩と黒は暖かい茶畠の中で寝ころびながら、いろいろ雑談をしていると、彼はいつもの自慢話をさも新しそうにくりかえしたあとで、吾輩に向かって下（しも）のごとく質問した。

「おめえはいままでに鼠（ねずみ）を何びきとったことがある。」

智識（ちしき）は黒よりもよほど発達しているつもりだが、腕力と勇気とにいたってはとうてい黒の比較にはならないと覚悟はしていたものの、この問いに接したるときは、さすがにきまりがよくはなかった。けれども事実は事実で、いつわるわけにはゆかないから、吾輩は、

「実はとろうとろうと思って、まだとらない」と答えた。

黒は、彼の鼻の先からぴんとつっぱっている長いひげをびりびりとふるわせて、非常に笑った。元来黒は自慢をするだけにどこか足りないところがあって、彼の気焔（注1）を感心したようにのどをころころ鳴らして謹聴していれば、はなはだ御し（注2）やすい猫である。吾輩は彼と近づきになってからすぐにこの①呼吸をのみこんだから、この場合にも、なまじいおのれを弁護してますます形勢を悪くするのも愚である、いっそのこと彼に自分の手柄話をしゃべらしてお茶（注3）をにごすにしくはないと、思案を定めた。そこでおとなしく、

「君などは年が年であるから、だいぶんとったろう」と、そそのかしてみた。

果然(注4)彼は、墻壁の欠所に吶喊してきた。

「たんとでもねえが、三、四十はとったろう」とは、得意気なる彼の答えであった。彼はなお語をつづけて、「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるが、いたちってえやつは手に合わねえ。一度いたちに向かって、ひどい目にあった。」

「へえ、なるほど」と、あいづちをうつ。

黒は大きな眼をぱちつかせて、いう。

「去年の大掃除のときだ。うちの亭主が石灰の袋を持って縁の下へはいこんだら、おめえ、大きないたちの野郎がめんくらって飛びだしたと思いねえ。」

「ふん」と感心して見せる。

「いたちってけども、なに、鼠のすこし大きいぐれえのものだ。こんちきしょうって気で追っかけて、とうとうどぶの中へ追いこんだと思いねえ。」

「うまくやったね」と喝采(A)してやる。

「ところがおめえ、いざってえ段になると、やつめ最後っ屁をこきやがった。くせえのくさくねえのって、それからってえものはいたちを見ると胸が悪くならあ。」

彼はここにいたって、あたかも去年の臭気を今なお感ずるごとく、前足をあげて鼻の頭を二、三べんなでまわした。吾輩も少々気のどくな感じがする。ちっと景気をつけてやろうと思って、

「しかし鼠なら、君ににらまれては百年目だろう。君はあまり鼠をとるのが名人で鼠ばかり食うものだから、そんなにふとって色つやがいいのだろう。」

黒のごきげんをとるためのこの質問は、ふしぎにも②反対の結果を呈出した。彼は喟然(注5)として大息していう。

「考げえるとつまらねえ。いくら稼いで鼠をとったって――いってえ人間ほどふてえやつは世の中にいねえぜ。人のとった(B)

鼠をみんな取りあげやがって、交番(注6)へ持ってゆきあがる。交番じゃ、だれがとったかわからねえから、そのたんびに五銭ずつくれるじゃねえか。うちの亭主なんか、おれのおかげでもう一円五十銭くらいもうけていやがるくせに、ろくなものを食わせたこともありゃしねえ。おい、人間てものあ体のいい泥棒だぜ。」

さすが無学の黒もこのくらいの理屈はわかるとみえて、すこぶるおこったようすで背中の毛を逆だてている。吾輩は少々気味が悪くなったから、いいかげんにその場をごまかして、うちへ帰った。

このときから吾輩は、けっして鼠をとるまいと決心した。しかし、黒の子分になって鼠以外のごちそうをあさってあるくこともしなかった。ごちそうを食うよりも寝ていたほうが気楽でいい。

（夏目漱石『吾輩は猫である（上）』による。）

（注1）　気焔＝燃え上がるような盛んな意気。

（注2）　御しやすい＝思うように扱いやすい。

（注3）　お茶をにごすにしくはない＝ごまかすのが最もよい。

（注4）　果然彼は、墻壁の欠所に吶喊してきた＝ここでは、予想どおり「黒」が誘いに勢い込んで乗ってきた、ということ。

（注5）　喟然として大息して＝ため息をついて嘆いて。

（注6）　交番へ持ってゆきあがる＝当時は、公衆衛生上、鼠退治を奨励し、とった鼠を交番で買い上げた。

一　──線部①「呼吸をのみこんだ」とありますが、この部分の意味として最も適切なものを、次の**1**から**4**までの中から**一つ**選びなさい。

1　コツをつかんだ。
2　息を吸い込んだ。
3　ため息を抑えた。
4　発言を我慢した。

二　═══線部**A**「喝采してやる」、═══線部**B**「とった」のそれぞれについて、「吾輩」の動作である場合は**1**、「黒」の動作である場合は**2**、「亭主」の動作である場合は**3**を選びなさい。

三　──線部②「反対の結果を呈出した」とありますが、このことは「黒」のどのような様子から分かりますか。**【文章の一部】**の中から探し、**抜き出し**なさい。

四　**【紹介】**に〰〰線部「様々に評価する」とありますが、**【文章の一部】**では、「吾輩」は「黒」をどのように評価し、どのような接し方をしていますか。また、あなたは、そのような「吾輩」の接し方をどう思いますか。次の**条件1**と**条件2**にしたがって書きなさい。

なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

条件1　**【文章の一部】**から、「吾輩」が「黒」を評価している表現を引用した上で、「吾輩」が「黒」にどのような接し方をしていることが分かるのかを書くこと。

条件2　**条件1**のような「吾輩」の接し方について、あなたの考えを具体的に書くこと。

※　左の枠は、下書きに使ってもかまいません。解答は必ず解答用紙に書きなさい。